

# 兒島常山軍記

一名備前常山軍記 又常山落城記

# 解題

兒島常山軍記 一卷

著者 未詳

此書は、備前兒島郡常山城主たる三村上野介高德一に、高範に作る。が、備前松山城主たる三村修理亮元親に與せる故を以つて、天正三年六月毛利氏の大軍に攻圍せられ、奮戦苦闘の後、一門枕を駢べて戦死したる顛末を記せるものにして、備中兵亂記を骨子とし、これを文飾したるものなれば、内容の史實は、兵亂記と殆ど異なる所なしといふべし。唯卷末に常山城の廣さと、池田氏入部の初城番として置きたる家士の氏名を列記せるを異なりとするのみ。

此書の著者は知るに由なきも、池田氏入部以後に成りたるものなることは、卷末に同家城番の氏名を記せるに就いてこれを知るべし。而して、池田氏の入部は慶長八年なれば、本書の成りしは、尠くともこの城番を置れたる時代なりしことを知るべし。

# 兒島常山軍記

著者 不詳

\*一、家親父子  
出馬して(イ)

\*二、都へ御供申  
御本意を加手  
させ奉ると信  
長天下に心有  
つて云々(イ)

\*三、中國悉く云  
々(イ)

抑備前國兒島郡常山城の由來をくはしくたづねけるに、其頃の城主三村上總介高德とて、代々源家忠孝の武士なり。また備中の國松山の城主、三村修理亮元親と申て高德の從弟、妻女は元親の妹なり。此度一族謀叛を企る事いはれある事なり。元來元親の父備中守家親、備前國浮田直家と不和にして、威勢をあらそひ、度々合戦に及ぶ所、終に勝負も見えざりしに、結局作州の内家親へふく有故、家親出馬して作州數ヶ城を責落し、すでに佛教寺まで責入りしに、浮田一族發向して家親を打とり、家親の嫡子元祐齋田の城にあるをうちとる。しからば當家の大敵なり。なにとぞして浮田をうちたまひ、鬱憤をはらさんと、元親・高德日夜心をくだきける。其頃の將軍はかまくら等持院尊氏十四代、源義昭公也。御兄義輝公は、三好が爲にうたれさせたまひしゆゑ、密にしのび出させたまひ、尾張の國織田信長を御たのみあるに、別心なくたのまれて、大軍を以て路次のかたきを切崩し、二度みやこへうつし奉るといへども、都には家老村井長門を居置き諸事仕置をさせて、萬事義昭公おぼし召の儘にならざるゆゑ、なにとなく御中不和にして、みやこの住居もおぼつかなき御身になりたまふゆゑ、西國御下向あつて、備後の國鞆津に御座候て、毛利家を御たのみありければ、不審なる事とはおもひながらも、代々の御家をうやまひたてまつり、ほどなく頼まれ參らせ、近國を催しけるに、御下知をそむくものもなく、ことごとく武命にしたがひ、御歸洛あるよしきこえければ、信長おどろき安からぬ事どもなりとて、元親方へ使者を立、密に申遣はしけるは、此度將軍へしたがはず、西國往來の通路をふさぎ、上洛をふせ當家へ忠良あるにおいては、やがて大軍にて出馬して、中國筋を追伏、本望を達し、備中備後兩國の分は元親支配たるべし。其上何事に寄らず未代までも、如在あるまじくと、かたく誓約を以て頼まれければ、元親一類あつまり、是社ねがふ所のさいはひかな。此度將軍へ力をあはせ、みやこへ本意あるとて人

\*一、事どもなり  
愈々當家は云々(イ)

\*二、臣可足を道とせば天地の味方たるべし(イ)

\*三、無力成羽に社は歸らる(イ)

\*四、上野之介高德申様尤がれ迄とて其儘に差置かば云々(イ)

\*一、御味方の御受申先松山を責落すべしと頓て云々(イ)

並の事にてわけて忠にもなるまじく、殊さら浮田も御催<sup>催イ</sup>にしたがひなば、我身の鬱憤達せん事かなひがたし。無益<sup>無益</sup>の事ともいそぎ當家は引かへて、運の末なる將軍を討奉り、信長へ忠良<sup>忠良</sup>はげみ、助勢を以て浮田を亡し、數年の無念此時に達すべしと、おの／＼評議きはまる。中にも成羽の城主三村孫兵衛ノ尉義成、嫡子孫太郎義兼<sup>明直カ</sup>はかつて此義にくみせず。父の怨を報ずるになんぞ他の力を頼まんや。およそ武士の道は忠と孝とにきはまりて、仁義をもととせば、たとへ君不足といへども、臣<sup>臣可足</sup>たるべきは天地の道たるべし。信長時の難をのがれんとて、當家をかたらふ。虎狼のはかり事にしたがひ、將軍家へ敵對し、一家末代不義朝敵逆心<sup>逆心</sup>の名を得ん事、口惜き次第なり。信長はじめは將軍の威勢をかりて、御畿内<sup>御畿内</sup>をしたがへ、後には將軍家を輕んじたてまつり、終にみやこを追出す。逆心のはたらき我儘なるふるまひ、人たるの法にあらず。斯様の人にたのみをかけては無益の事にて候と、義理明に諫言す。良藥は口に苦く金言<sup>忠イ</sup>耳にさかふとや。元親をはじめ、舍弟宮内少輔・上田孫次郎に至るまで承引せず。當家運をひらくべき時來りぬと存る所に、一族の身としてたちまちにひるがへる。奇怪成る次第<sup>也イ</sup>かな、若利運なりがたくばかねて覺悟の所なりとて、以の外の立腹あり。親成父子はち<sup>三</sup>からなく、ほう／＼成羽にかへらる。其座に有合す諸さむらい兎角親成を呼返し、一家和睦あつてしかるべしと、色々意見申せども、元親一向同心せず。所詮かやうの臆病者味方にあつては勝利なりがたし。同心せぬこそさいはひなりとぞいひければ高德申様<sup>四</sup>、もつともかれらが同心せぬを其儘にて指置候はゞ、將軍家へさんそうし、逆寄にするはしれたる事、先づ信長へ訴へ加勢を乞ひ、手合せに成羽の城を責落し、義成父子に腹切らせ、それより浮田を討ほろぼし、西國往來さしふさぎ然るべしと申さるれば、此義もつとも然るべしと、いそぎ信長へ使者を立、軍の用意ときこえしは、にが／＼敷くこそみえにける。是は扱置、三村孫兵衛尉父子は成羽の城に立かへり、やすからぬ事とおもひながらも、一族のさんそうもなりがたく、捨置く時は元親高德責來るは必定なり。いかゞはせんとおもふ所へ、將軍より密かに御頼<sup>催イ</sup>のもよふし、是天道の御恵とよろこびいさみ御請<sup>一</sup>申、先づ松山を責落<sup>責落</sup>し頓て加勢を乞候得は、藝州備後の兩勢都合七千三百餘騎、天正三年五月二十四日午の刻、松山へ押寄せときの聲をぞあげにける。城内にも聞合せ、我先にと出むかひ、爰をせんと、たゝか

\*二、事なれども  
今やなどよせ  
思ひもよらば  
ず  
\*三、軍兵共七八  
騎半死半生云  
々(イ)  
\*四、勝どき上げ  
て成羽の城云  
々(イ)

\*五、字藤木に  
綴り岸根にはた  
を上げ(イ)

一、以下次行の  
明れば五十一  
字本書底本脱  
落に付別本に  
依り補入す

ひける。城にも兼て期したる事なれば、今押よせ来るべしとはおもひながら、よう／＼手勢百騎ばかり、九牛が一毛にも足らざる小勢、爰かしこに討ちちらされ、舍弟宮内討られければ、元親は妻子もろともに夜にまぎれ、いづくともなく落失せけり。あくれば二十五日早天に、寄手は城にみだれ入て見れば、はや大將は行衛もしれず。のこるものとははきのふの軍に深手を負し軍兵共、半死半生七八騎、前後をぼうじ伏居たり。城外にはうたれし死人四五騎、此外には犬猫さへもあらざれば、城に火をかけ、成羽の城に歸陣あり。其後二十八日元親阿部山にあるよしきこえければ、藝州勢おしよせ、同二十九日討取候事將軍へ注進申也。是より高德をほろぼすべしと、成羽にて諸陣軍勢を催し、同六月四日常山へむかはる。大將三村孫兵衛尉親成、二千餘騎にて彦崎に陣を取り、嫡子孫太郎親兼は宇野津・追川に陣を取り、一千三百餘騎にて向はる。小早川伊豆守光重は山村に陣を取り、一千餘騎を二手にわけ、備前は豊岡まで責寄ける。浦野兵部尉宗勝は二千餘騎にて、用吉より宇藤木に旗をあげ、双方相圖の時を合せ、同六日辰の刻大手の木戸よりみだれ入り、二の丸に責寄せ鬨をどつとぞあげにける。高德少しもさわがず、命を助からんとおもふ者こそ、鯨波の聲にもおどろくべけれ、明日の辰の刻には大矢倉にて、一類諸ともはらを切り、名を後代の記録にとどむべしと、しづまりかへつて居たりける。城中にときを合せざるは、いか様小舟のりて島渡りなどせば、責口の油断と成べしとて、麓の茂曾路に火をかけ、逆茂木をかなぐり捨て、をめきさけんで責入ける。高德立出、多年それがし藝州に對し鬱憤有る故、元親謀叛の張本はそれがしなり。然所に元親無下に生害に及び、我いきて何の面目かあらん。一日も早く死地におもむくべしとこそはおもへ。いで／＼最期のはたらき見せんとて、鎧なげかけ腹帯メ、きやうもんしのきをたゝみ鉢巻し、鐵炮追取て廣ゑんにをどり出、二ツ玉にてすき間もなく放ちかくる。嫡子源五郎高秀は平生強弓を好み、銀のつゝ打たる弓を射る。是も又鐵炮を放ち、舍弟小七郎高重は三人張に十三連三つ伏取て引メ、差語引詰さん／＼に射る。三人の飛道具にて討たる者數をしらす。寄手此勢に氣をのまれ、其日の陣は引にける。斯て城内の兵共、敵人に打紛れ二十騎三十騎づゝ麓迄落行きしが、こゝかしこにさゝへられ、手負死人數を知らず。明れば七日のあかつき、城内酒宴の聲きこゆ。多くは女の聲にて、たがひにわかれをしとぞおもは

\*二、備中兵亂記  
繼母に作る本  
書亦後段高德  
の妹の所にて  
老母と云へる  
を見れば此處  
明に誤記なる  
べし

\*一、解て颯と打  
亂し(イ)

\*二、事なれば敵  
あながちに害  
すべからず何  
國へとも云々  
(イ)

られる。同辰の刻敵陣にむかひ、一類生害の由告げければ、人々我先にと出合ければ、高德の叔母<sup>\*二</sup>五十七歳なる、先づ一番に自害をせんとて、我世にとどまりてかゝる浮目をみる事も、生々々の業因淺からず。高德藝州に遺恨を含み入道せられし事をだにも、世にもものうくおもひしに、腹きるを見るならば、目くれ心もくらむべし。しばしも跡にのこらんより、先達て自害を遂べきと、ゑんばしらにかたなのつかをまき付、其儘行當り<sup>騒イ</sup>貫きける。高德走りより五逆の罪おそろしく候得どもとて、御首を打落す。嫡子生年十五歳、父上の御介錯仕度候得ども、少年ゆゑ跡にのこらば、御心がりにおぼし召たまふべし。逆さまにては候得ども、御先へはら仕るといひければ、高德きこし召、扇子を開きあふぎ立、我が子ながらも神妙なりとて、顔つくくく打ながめ、さかりもまたぬ花紅葉、今朝の嵐にちりはつる。哀れはかなき世のならひと、しばし袖をぞひたさる。高秀も共になみだにむせびしが、三途の先がけ仕るとおしはだぬぎ腹十文字にかききれば、高德立つより首打落し、二男八歳になりけるを取て引よせ二刀さし通し押伏たり。高德の妹に十六歳になり玉ふ姫君、これは藝州鼻高山の大將は高德の弟なれば、此君一人是へ立のきたまへと申されければ、思ひ寄らざる事なりとて、老母の貫きたまふ刀にて、乳のあたりをつきつらぬき、おなじ枕にふしたまふ。高德の妻女三十三歳になり玉ふは、男に越えたる武勇也。われ武士の妻となり、最期にかたき一騎もうたずして、やみくると自害せん事口惜き次第なり。既に三好が従弟叛逆の一類たる身、女たりとも一軍せで叶ふまじきと、鎧取て着、上帯メ、三尺七寸の太刀を帯し、たけとひとしき黒髪を打亂し、三枚甲の緒をむすび、くれなゐの薄衣上は打かけ、すそ引あげ腰にてむすび、白柄の長刀小脇にかいこみ、廣<sup>庭</sup>ゑんにをどり出玉ふ。春日の局其外女房はしたにいたるまで、皆々つゞいて飛であり、こはいかなる御事ぞや。さなきだに女<sup>女入イ</sup>はつみ深く、成佛せずと承はる。殊更修羅の業因はいかでもぬがれたまふべき。只々思ひとどまりたまひ、心静に御自害をとげさせたまへやと、鎧のそでにとりつけば、からくと打笑ひ、御身達は女性<sup>\*二</sup>の事いづくなりとも一先しのびたまへ。自は邪正同一如とくわんねんし、此戰場を西方の浄土として、修羅のくるしみも極樂のいとなみとおもへば、なにかくるしかるべきと、そで振切て出行きたまへば、とても散るべき花ならば、おなじ嵐にさそはれて、死出三途<sup>御供イ</sup>のさきがけせんと、髪

\*一、先達て降人に出ると見ゆるとて差控へ云々(イ)

\*二、宗勝御へんは西國一の名と云々(イ)

\*三、決せんとしきたい有り其内にも(イ)

\*三、幻の身の面影(イ)  
\*四、件々の太刀を口にくはへうつぶしに成つて失給ふ(イ)  
\*五、本國に立歸る一族の者共迄(イ)

とき亂しはちまきし、爰やかしこにたて置き長柄の長刀引提げて、三十四人の女房、我先にとかけ出づれば、累年厚恩の家僕共是を見て、八十三人死を一統に極め、我おとらじとかけ出る。敵此有様を見て、城内に妻子を先立出るとて、差控へ居たる所に、小早川の先陣浦野兵部宗勝、七百餘騎の真中へかけ入る、大將宗勝下知して曰、城内女人にさまをかへ、寄手をあざむくと覺たり。是處女の如くし脱免の功を作す計略と、孫子の秘する所、あなどつて不覺を取るな兵共と、陣を堅めて控へしかば、あへて破るゝ事もなし。されども屈究の勇士死を一統に輕んじ、一面に突立れば、寄手は足を亂し、討るゝ者數十人、疵を蒙る者數をしらす。此勢に來じて高徳の妻女、腰なる銀のさいはいとり出し、眞先にすゝんで、かけ破れやもの者共と、大勢にかけ合ひ、いきをもつかずたゝかひける。さすがの宗勝武勇をたしなめば、女に向ふ者もなく、城中の兵共、おもてもふらずたゝかへども、多勢に無勢叶はざ社こぞのこりすくなにうたれける。妻女も今は是迄と、大將兵部が馬のまへにかけむかひ、宗勝は西國にかくれなき勇士とかや。我女なれども一勝負仕らん。そこ引玉ふな浦野殿と、長刀水車の如くふり廻し、只一文字にかゝり玉ふ。宗勝引しさり、いや／＼御身つよきにせよ、女性なれば相手にはなりがたし。高徳と勝負を決せんといふ内にも、横合より雜兵四五騎かゝりけるを、長刀追取のべ七八騎なきふせ、薄手負ひながら、そのき玉へ人々と、腰なる刀ぬき出し、是は我家重代の國平が打たる名作なり。當家より父家親に參らせし秘藏、他に異なりしが、重代のよしききたまひ、返し置れし太刀なれば、父上に添ひ奉ると思ひ身を離さず持きたりしが、死後には宗勝に參らす。後世弔ひてたまはれといひすてゝ、城内にかけ入し有様、只刀八毘沙門の喜見城を守護したまふとき、吉女天女諸共に、修羅を責討つきほひも、かくやとばかり思はれて、見る人舌をまきにける。かくて西にむかひ手を合せ、我西方十萬億土のみだを頼むに非ず、己心の彌陀、唯心の淨土、今爰に現ぜり。佛も如く露亦如く電とき玉ふ。誠に夢の世に、あはれ身の面影つゆに宿かる稻妻の、はや立かへる本有の城、南無阿彌陀佛と念佛し、太刀をくはへ、うつ伏になりたまふ。ためしすくなき女性なり。高徳も西にむかひ、南無西方彌陀如來、今日娑婆の苦のがれ、本國に立かへり、一族の者共と、おなじ蓮にむかへたまへと十念して、腹十文字にかきゝれば、舍弟小七郎介錯し、其身も自害し高徳の死骸により

六、其後川留丹  
後守城御預け  
にて居住有り  
川云々(イ)戸  
後城主極り

かゝり、おなじまくらにふしたまふ。見る人なみだをもよふしける。頓て數多の首共、備後の國鞆津へこそはおくりける。扱備中を平均しておのゝ功の淺深にしたがひ恩賞を行はれ、毛利家の大將たち凱陣あるこそ目出度けれ。扱常山へは藝州より城番として、山本四郎左衛門・渡邊伊豆<sup>津イ</sup>兩人を居置き、其後城<sup>大</sup>主きはまり、戸川肥後守知行五萬石、入道して<sup>友イ</sup>祐林といふ。

常山 高三百間。廻り四十二町。

丸數十四

二ノ丸

表丸	土倉兵庫	一丸	虫上惣左衛門
二丸	池田利兵衛	二丸	飛山藤内
三丸	津島九郎左衛門	三丸	師子洞太郎左衛門
四丸	近藤四郎左衛門	四丸	横井意仙
五丸	戸川助左衛門	五丸	田中藤之介
六丸	進藤	六丸	國富源左衛門
七丸	知行千石進藤佐吉	七丸	知行三千石中島九郎左衛門

兒島常山軍記終